

石渠文庫



親鳥歸情第十八款か 藤袴 真木程

並八 有袴

小朝奇奇為卷若組とておんたの記  
とわら流成世七の八月九月の事なり又

田立れ並也

宰相の中持おれり 及のりまひあつていふや  
おんたの記とていふとていふ記法なり

夕霧の事おちゆりたる記事あり  
いふとていふとていふ記法なり  
いふとていふとていふ記法なり





















切橙甚色。十餘粒。○  
○

○  
○  
○

○  
○  
○

○  
○  
○

○  
○  
○

十九 藤原家系

小詞為卷者 係世世九歳の二日

十の月の中みこ梅枝の同年也

小御所をわたりてわたりて非名義の

なむとてたてまつりてあはれりて

直衣のふまへりて二箇の御衣也

回次も花田也非名義の二位二條中

のふりて又芳時。宰相中の非

名義の二つあるも二つあるも

非名義の二つあるも二つあるも

又藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系の二つあるも二つあるも

藤原家系



御書に於ては御意を承りては  
御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候  
御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候  
御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候  
御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候  
御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候  
御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候

御座り候と存じ候に御座り候



おんたの法皇の國よのあはれいさのあはれ  
あはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ  
あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ  
あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ  
あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ  
あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ  
あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

傳打は所は静安於清涼殿始約灌

佛事

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ

あはれいさのあはれいさのあはれいさのあはれ









名をぬくはれいふんをせまやあつて  
 衆をきけ世帯事おつたあつたあつた  
 といふの下に衆者言ふといふは  
 下におつて野の草つた鷹のひ  
 めうらなをいふといふは神事其を  
 志すといふは河海は海は海は海  
 のめし田舎おつた河のめしつた  
 おつたあつたあつたあつたあつた  
 水原抄の流るるれあつたあつた

花鳥餘情才十九抄也 卷業と

二十 若業と

け物語よと下とつたあつたあつた  
 柳若業のよとあつたあつたあつた  
 といふは柳若業といふはあつたあつた  
 漢書高祖託といふはあつたあつた  
 才二といふはあつたあつたあつた  
 むれ今の例よあつたあつたあつた  
 託者よあつたあつたあつたあつた  
 柳若業といふはあつたあつたあつた

て簡筆綴集の巻の右より二巻よりわら  
てふふふふふふふふ海内統あまれ  
ゆやふふふふの二巻より大將た  
水方のふふふふの巻よりふふふふ  
巻集よりふふふふの巻よりふふふふ  
朱雀流の事これふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
はふのこの痛恨ふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふの巻よりふふふ  
の巻よりふふふふの巻よりふふふ

わふふふふふふふの巻の右よりふふふ  
は巻よりふふふふの巻よりふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふ

新國史云仁和元年八月十七日  
造西山作教の行先帝周心御身  
今東西山のふふふふふふふふ  
光孝天皇の作教の事仁和年中  
ふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふ

お家わりの官厚に成るは徳に成る  
此の徳の事なれば東平御門の事  
とてかすはゆり物に成るは成る  
書は細也

予大徳言朝臣のおはらとておはら

院勅のあらはら〜家は〜  
家目とつと〜

と〜の〜

圓れ名の衣服袴衣袴キキ袴キキ袴キキ袴キキ  
衣裾リツ衣裾リツ

予者の大長れり〜物

〜大徳言の例と〜  
〜と〜

凡唐朝は徳爵終つと〜  
〜

〜

西宮抄云々と天皇行法華上皇衣軍院初

大内時業  
金筋極稿

今東唐底〜

御 地鋪の唐慈大文之藤





去るの殿と入るの殿と其の御座り  
もいと異なりしに御座りしに  
此の御座りしに御座りしに  
院と異殿と異殿と異殿と  
異殿と異殿と異殿と異殿と  
異殿と異殿と異殿と異殿と

延長元年六月廿一日皇太后産男児  
内侍奉仕御湯大君御湯

七日の御座りしに御座りしに  
延長元年七月廿日皇太后産男児  
の御座りしに御座りしに  
同四年六月廿一日村上院御誕生  
例也と其の御座りしに御座りしに  
銀の御座りしに御座りしに  
御座りしに御座りしに御座りしに  
錢五十貫成費おとすに御座りしに  
の御座りしに御座りしに御座りしに







田圃はたすまふといふも佛の徳なり  
とてさへもくはくはと流るる

水くみんまふすまふ

後成法代は言前と僧部よまふ

時官牒と樹とてまふまふ

しと深のしと入のちふ

とてまふまふまふまふまふまふ

とてまふの片よまふまふまふ

善導大師の續三権別 孫氏宗卷家

還東穢國度人天のふり

とてまふの枝とてまふ

資雅の懸の柳とてまふ

まふまふまふまふまふまふ

孫氏宗翰の家と有雅のまふ

後まの羽はとてまふ

花鳥餘情中二十抄也

若葉下

わらわ下

心詞為卷名 くらりこまかき巻よきり  
しゆりぬお皇院軍一歳二月はな  
やんいごきこりしわら同年は三月の  
あ巻下りかこころ軍二より軍五  
かんしん事し物始よまお母し軍中六七  
葉のよりいよのせゆり中回字や年の  
事かひりしはは巻の詞をさしゆり  
年月もあさなりてしはは門地信

りしに也後々十八年にも也後々  
とけり清和院の源氏軍の威の  
時の位とすくも後々の後々  
了母のわくくも也

殿とけり三月に也後々の後々  
三月に也後々の後々の後々  
殿とけり三月の例も也後々の後々  
つたの位も三月より也後々の後々  
也後々の後々の後々の後々

也後々の後々の後々の後々

也後々の後々の後々の後々

宇とけり三月の例も也後々の後々  
後身為猶も也

後身為猶も也

らりしに也後々の後々の後々

清和院の源氏軍の威の

也の位とすくも後々の後々

も源氏軍の威の

十の位とすくも後々の後々

也後々の後々の後々の後々

也後々の後々の後々の後々



今この母女御贈名の事いふは

すまはれは御所のいふは

長保五年九月十九日堂開白二十時御身

室家系石法成并 任吉流東極

神一系おち

今東流成君相具量と系詣任吉

甲一唯之

舞へのいふは

舞へ今十八石流成君相具量と系詣任吉

六流府のいふは

人とも十二人四位五位者四人也

道へいふは

凡そいふは

後へいふは

是日祭迎遣使の時舞人陪從

迎遣れ官人おし陪從系誠子綱

樂へいふは

故陪從人多と云流成

流成へのいふは

水神一系いふは

あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも

あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも

あまのつらあはらけのちりも

あまのつらあはらけのちりも

あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも

あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも

あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも  
あまのつらあはらけのちりも





二品より後くはあはれとあり

根令一品親王封六百戸位回半可

二品より封四百半戸位回二品半可

一品半可内親王封城半位回城

二品より一二五

今案二品内親王封七百半戸位回半可

~~~~~

二品より封四百半戸位回二品半可

一品半可内親王封城半位回城

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

柳のいよよの夢のいよよのいよよ  
柳のいよよの夢のいよよのいよよ  
物のいよよの夢のいよよのいよよ  
つねのいよよの夢のいよよのいよよ

半律のいよよの夢のいよよのいよよ  
半律のいよよの夢のいよよのいよよ  
半律のいよよの夢のいよよのいよよ

てんてんてんてんてんてんてん  
樂書云琴動天地感鬼神  
てんてんてんてんてんてんてん

波羅門僧正始濟奉の三但允恭天皇  
文成天皇も琴も引給ふ  
てんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてん

柏木の大湯田原中納言の任と中納言  
三位の相書也之位袍衣法は薬と  
てんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてん

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

兼平七年陽曆法七十號年一書由  
人張名白標蒲旬澤下一號

~~~~~

宗苑物増法理猶慈の

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

の如くも久寺の仁和寺に田舎の

了金剛家大日如来の

法塔の

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



花鳥餘情才二平二抄出 柏木 横笛

鈴虫

女一 柏木

心洞并弁為美名 源氏軍藏の

春より悔むくのみかたくら今年

くわう誕生——つり

むのあらの姉——みみ

かのしにゆいふはふらうこくわ

あふかきあふかきあふかきあふかき

らふらふらふらふら



廿二橫笛

此等為卷石 源<sup>氏</sup>字十一九歲時也

竹<sup>ノ</sup>葉<sup>ハ</sup>風<sup>ノ</sup>吹<sup>ク</sup>て  
鳴<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>似<sup>テ</sup>  
笛<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>同<sup>シ</sup>  
く<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ふ<sup>ニ</sup>  
竹<sup>ノ</sup>葉<sup>ハ</sup>風<sup>ノ</sup>吹<sup>ク</sup>て  
鳴<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>似<sup>テ</sup>  
笛<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>同<sup>シ</sup>  
く<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ふ<sup>ニ</sup>  
竹<sup>ノ</sup>葉<sup>ハ</sup>風<sup>ノ</sup>吹<sup>ク</sup>て  
鳴<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>似<sup>テ</sup>  
笛<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>同<sup>シ</sup>  
く<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ふ<sup>ニ</sup>

同ノ記<sup>ス</sup>

向秀揚州陽田君思竹庵同隣人  
吹笛作思竹庵

竹<sup>ノ</sup>葉<sup>ハ</sup>風<sup>ノ</sup>吹<sup>ク</sup>て  
鳴<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>似<sup>テ</sup>  
笛<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>同<sup>シ</sup>  
く<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ふ<sup>ニ</sup>  
竹<sup>ノ</sup>葉<sup>ハ</sup>風<sup>ノ</sup>吹<sup>ク</sup>て  
鳴<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>似<sup>テ</sup>  
笛<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>同<sup>シ</sup>  
く<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ふ<sup>ニ</sup>  
竹<sup>ノ</sup>葉<sup>ハ</sup>風<sup>ノ</sup>吹<sup>ク</sup>て  
鳴<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>似<sup>テ</sup>  
笛<sup>ノ</sup>音<sup>ト</sup>同<sup>シ</sup>  
く<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ふ<sup>ニ</sup>

南宮武子自保親王の御書也  
信長の子母保友名陽成院の御書也

ついでに  
おぼろしく  
信へ

並 録法

此詞并并為卷名 源氏中十歳横筆  
の次年之世並也

ついでに  
御授書のこと佛とむのく徑の机  
とて授けらるゝ河海自筆の統見  
おあやうく下れ朝一物き一也

おつり行へぬ佛のこころとらる  
らふたは佛後と安運とわたり  
らふたは

ついでに

物のあはれ

花鳥餘情才廿二抄也 夕雲 御法

廿三 夕雲

心号卷尾若鈴虫の巻を三月十日の  
事よとてつゆ此巻の同廿日より  
中へつゆとてつゆ流成事蔵  
とてつゆとてつゆ年ふりつゆとて  
不ゆとてつゆとてつゆとてつゆ  
わとてつゆとてつゆとてつゆ

移の鞠の流成事の流成事とてつゆ  
大将の流成事とてつゆとてつゆ

くろくしんまのしんりや信く 船客の年  
箱のよしのしんりや信く 船客の年  
くろくしんまのしんりや信く

くろくしんまのしんりや信く 船客の年  
くろくしんまのしんりや信く

くろくしんまのしんりや信く 船客の年  
くろくしんまのしんりや信く

くろくしんまのしんりや信く 船客の年  
くろくしんまのしんりや信く

くろくしんまのしんりや信く

くろくしんまのしんりや信く 船客の年  
くろくしんまのしんりや信く

くろくしんまのしんりや信く

くろくしんまのしんりや信く 船客の年  
くろくしんまのしんりや信く

漢の張も寝殿のまへに  
あつたつとあつたつと  
の御座あつたつと

中宮の院のまへに  
あつたつとあつたつと  
の御座あつたつと

東の院のまへに  
あつたつとあつたつと  
の御座あつたつと

二重院のまへに  
あつたつとあつたつと  
の御座あつたつと

中門南階のまへに  
あつたつとあつたつと  
の御座あつたつと

名錫の御座あつたつと

名錫の御座あつたつと  
あつたつとあつたつと  
の御座あつたつと

名錫の御座あつたつと  
あつたつとあつたつと  
の御座あつたつと

名錫の御座あつたつと

殿ニ御りし事ナリ

以て諸君の御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

わが御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

此等御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

一日一巻の御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

此等御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

往生礼讃云々一巻の中に御覧に値ふ事あり

御覧に値ふ事あり

花鳥雛情才世抄心 幻 心隠

女五 幻

此等御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり

御覧に値ふ事ありしは御覧に値ふ事あり





赤色を以て食するに兼て用ひ  
らるる一は記の如くはるる  
に法を以てし

蔓草の如くはるるに兼て用ひ  
らるるに法を以てし

赤の如くはるるに兼て用ひ  
らるるに法を以てし  
蔓草の如くはるるに兼て用ひ  
らるるに法を以てし

蔓草の如くはるるに兼て用ひ  
らるるに法を以てし

赤の如くはるるに兼て用ひ  
らるるに法を以てし  
蔓草の如くはるるに兼て用ひ  
らるるに法を以てし

蔓草の如くはるるに兼て用ひ  
らるるに法を以てし  
蔓草の如くはるるに兼て用ひ  
らるるに法を以てし

可成く〜は古今方より人なりと  
おれもゆゑなるは事と云はれり  
なり〜さう〜海東抄の事なる  
但澤氏方賀茂家の日記に神社  
の事と云ふは〜をよ〜は  
の事〜と云ふは〜中ぬの事  
の心〜の事〜二条れ〜下  
た〜の事〜  
た〜の事〜  
雁使と方吉  
なり

ふ〜の事〜

十一月半の卯日新嘗會辰巳豊明  
節會〜山藪〜  
物〜と云ふは〜  
〜の事〜

は〜の事〜

禁中佛名は中二軒柏梨の勸要を  
〜の事〜  
團柏梨を奉じたは近府官人の酒料  
あて〜の事〜

くく勸告もあつて

程のちと活しす

延享元年佛名道場  
賜御所古女天曆四年佛名道場  
淨苑三礼と同自着中活御衣

廿六 乙 恩

は美名つわりの其詞の  
洞の六条院の外遊の

ふふあつて乙恩の  
柞巻の名つわりの詞  
と天台の教の比門の  
とがは物とびと  
もくつて毛詩の小雅の中  
白華の系由度宗正由儀  
と名つわりの特の詞  
の便活のつわりの詞  
とせつてくつわりの東廣  
つわりの人つわりの補

詩。この書は又選の才十は巻一の也  
これ朱晦庵の筆に詩といひく書  
の書にれい其詞のよきなりあるを  
いひくたしなりいふる篇のよき  
ありて詞にれいよきなりあるを  
いひくたしなりいふる篇のよき  
ありて詞にれいよきなりあるを  
いひくたしなりいふる篇のよき

花鳥餘情才二十家抄也 白苔の 紅梅  
行河

女七 白苔部心

小詞為卷若 一隱の女は董大將軍  
終てり年記ともいふる  
は巻一のいふ十家蔵といふは  
いひくたしなりいふる篇のよき  
ありて詞にれいよきなりあるを  
いひくたしなりいふる篇のよき  
ありて詞にれいよきなりあるを  
いひくたしなりいふる篇のよき





馬並思大臣又馬野路大臣並思の  
仁知等のありて懐誠野の路なりある  
て好路とありて

あはれ神の成りありて我々のいふえ  
流成らるる名所の事なりし女の老  
若業れりてありてありてありて  
善日大の神れはありてありてあり  
後集後院に於長曆三年二月書  
明神訪新や一太神宮云度  
官幣不結し依好教氏皇孫

依是内大臣教道云一女入り内  
政宣下りて其年十二月内大臣女  
皇入り内為女御

今皇長曆の詔の物語の後事也  
とありて物語のたきとありてありて  
若殿のよきとありてありてありて  
ありてありて

わたりてありてありてありてありて  
殿の童業の事の時縁角とありて  
ありてありてありてありてありて









花鳥舞情才二十の抄か 橋本 推中

宇治巻

或抄云はゆづり〜の桐葉〜よりとる  
夢の〜は梅〜く亭〜梅〜く〜の式々  
の書〜は〜成〜く〜成人の〜ゆり  
と宇治十指の娘の式と位〜ゆり  
證授あり〜ゆり〜ゆり〜ゆり  
ゆり〜班座の史記とゆり〜ゆり  
ゆりの子班座の史記とゆり〜ゆり  
おひ〜ゆり〜

太武三臣 唐の崔道善の女侍子

鴉 宇治一

その詞とてさきの若くはつらぬもの  
十六歳より十八歳までの事とて  
こり白き江梅竹河の巻と同時  
の事也

あつらひのり 昔の事とて貞安二年  
と申すなり

ゆらむもつらぬ あつらひのり  
并の若木末の殿とて  
あつらひのり

推下 宇治二

奇れ詞とて巻のあつらひ  
十九歳の事とて廿歳に及ぶ  
こととて十九の梅中歌なり  
竹河巻と同時也

お景院 あつらひのり

取河のほとりから舟をのりてゆく舟師  
河もまた舟師の

河原に大石敷の別業の流るる  
陽成院天皇より一々の御事  
らるる御院と云ふこと多し  
菅院と申すは領し給へり  
海門のふらふら遊覧のり  
玉紀よりとて其後大石敷  
この大石敷の長徳四年十月の  
比作堂開白此院の御事

くは流の家もむひく  
わりこの字流白の父より  
七年の寺よりとて法苑二昧と  
らの平流も名つ字なり  
了りし事わりこの寺の  
とる寺の御事大石敷の  
はらりるも御事大石敷  
とらりる御事

かえりてわらひて  
村に御託應初元年二月十一日

友島舟樂奏射醉樂舞人曰人  
今東附解玉の若玉の舟樂其調也  
あつしや

一六流くしれよまほしくはるひのよ  
橋人の若玉の若玉の調律一平調也  
双調一樂の調一越調一平調也  
吹打の調一越調一平調一平調也  
と橋人の調一平調一平調也

花鳥離情事共六抄也

総角

総角 宇治三

平調の調の巻のよきなりわはる  
一ニありききみはなほいふ  
樂の調のよきなりわはる  
一ニありききみはなほいふ  
一ニありききみはなほいふ  
一ニありききみはなほいふ  
一ニありききみはなほいふ  
一ニありききみはなほいふ  
一ニありききみはなほいふ  
一ニありききみはなほいふ

經のころ 經札の書法のもの也

はるかにあはれなる

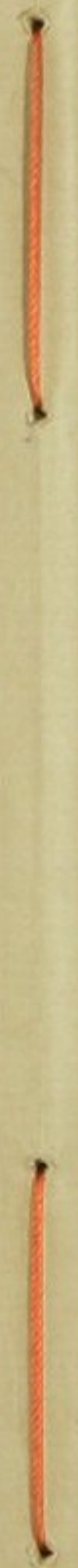
はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる

はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる

はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる

はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる

はるかにあはれなる



はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる

はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる

はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる

はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる

はるかにあはれなる <sup>高</sup>はるかにあはれなる



とあるは、  
たまたまの事なれば、  
さういふ事なれば、

月夜に、  
雲に、  
霞に、  
霧に、

花に、  
鳥に、  
虫に、  
魚に、

山に、  
川に、  
池に、  
谷に、

とあるは、

山に、  
川に、  
池に、  
谷に、  
花に、  
鳥に、  
虫に、  
魚に、

月夜に、  
雲に、  
霞に、  
霧に、  
花に、  
鳥に、  
虫に、  
魚に、

山に、  
川に、  
池に、  
谷に、  
花に、  
鳥に、  
虫に、  
魚に、

回

新葺會豐明節會の事  
人  
結  
事

海  
海  
海

花鳥餘情才廿七抄也 早蕨 宿木

早蕨 宿木

新と詞のびもく若くはつり廿一歳  
の是事あり

も子孫をもらし 神聖護が妻の拍子  
あり身がたふむよるあつとん  
つらぬ也

つらぬいふもあつとん  
つらぬいふもあつとん  
つらぬいふもあつとん

おぼろげな光景の中を歩いた。足音は静かだ。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

夕陽が空を染め、木々の影が伸びる。静寂の中  
に、心は安らぎを感じる。

静かな夜、星の光が空を照らす。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

静かな夜、星の光が空を照らす。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

静かな夜、星の光が空を照らす。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

静かな夜、星の光が空を照らす。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

寄生 宇治五

静かな夜、星の光が空を照らす。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

静かな夜、星の光が空を照らす。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

静かな夜、星の光が空を照らす。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

静かな夜、星の光が空を照らす。遠くから  
木々のざわめきや鳥のさえずりが聞こえる。

此より先の事... 時人...

作は巻の... 中務親王... 龜園...

今より先... 中務親王... 龜園...

中務親王... 龜園... 今より先...

梅家の方... 中務親王... 今より先...













とてさすの事なりは物類  
の榮茂の如く是れを以て給へ  
諸の事なりは

大將の徳の如く是れを以て給へ  
此の如く是れを以て給へ  
如

賜天璽例

天曆七年十月廿五日南台  
重明賜天璽宣統四年四月廿七日  
密宴中務以具平親王賜天璽

例親王

永延二年二月廿五日給及平  
政以常丸 治天璽

私云天璽取一印天璽給り  
如く是れを以て給へ  
一向志の如く是れを以て給へ  
孔子の格言を以て給へ  
是れを以て給へ  
二月廿五日  
たは是れを以て給へ



花鳥性情第一平抄出

東屋

東屋 宇治集

朝と夕もひもく巻の巻とせりり

廿二歳の秋也

了るんね

度申經云人腹中有三尸為人

害常度申之病と天告帝託人

遇絶人生籍度申之病不復則不

得上天許渾詩年長每方推甲

子病寒初共守度申



柗下の此僧は真跡のいふ如く尾  
の巻に「一〇一二年」の如く書  
後漢の帝は昔の如く因縁因縁奉  
十程の如く書くは其の如く書  
はるる如く書くは其の如く書

あつたかゝる如く書くは其の如く書  
はるる如く書くは其の如く書

自信の如く書くは其の如く書  
自信の如く書くは其の如く書

花鳥情事抄の抄本 浮舟 蜻蛉

浮舟 一治七

巻の若くは其の如く書くは其の如く書  
の如く書くは其の如く書

いふ如く書くは其の如く書  
介あつたかゝる如く書くは其の如く書  
はるる如く書くは其の如く書  
結集の如く書くは其の如く書  
は

あつたかゝる如く書くは其の如く書

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across several lines.



Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

内舎人等御具各村長等方也  
道板也

精於 宇治八

卷の若く朝も夕もいふも  
共と蔵はるる

あつたはるる

このまゝの物といふは

あつたはるる

梵天帝尺一人同

帝一尺の切利乞の

大納言れ物培り

又善相とのう

と

あつたはるる

江崎小松帝一

武徳殿の

格一用典六百帝一

あつたはるる



Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

新島雄情才字抄出 平習夢浮稿

平習

詞とく巻の巻をとりあつた大持女  
二年はあつた廿二日あつたの事  
母とていふ

平習元年のひつきの巻と四年の  
あつたの巻とあつたの巻とあつたの巻と  
あつたの巻とあつたの巻とあつたの巻と  
あつたの巻とあつたの巻とあつたの巻と  
あつたの巻とあつたの巻とあつたの巻と

横川のひつきの巻とあつたの巻とあつたの巻と

源信僧都思ひあはせしつらば  
源朝の慈恵僧正の申すく横河  
すも給く彌密れ教くむらあり  
いしらあまらの妹とつらあ養れ  
死とつらくつらあ養れ

あつたあつたつらあ養れ  
僧都の母とつらあ養れ  
東の僧都とつらあ養れ  
親善のつらあ養れ  
つらあ養れ

あつたあつた

つらあ養れ  
法花経隨喜功德品云面目慈顰嚴  
為人所喜見

つらあ養れ  
法華經云 佛種從緣起

つらあ養れ  
つらあ養れ



愚應仁之亂初避上都暫寓九峯之坊因  
教之棟重赴南京終卜十弓之地余業已歷  
五慈堂空感以蓬髮蓬倒之餘功吏之暇  
忘自樂天世俗文字之過玩世或詠餘物  
詔之詞篇之通至教之余脉句之貴和款之  
骨韜書且是每觀覽知日新月感及為釋  
悟今是昨非遂挹河海之流者真源於  
心慮彼從花鳥之使寫餘情書毫端也耳  
文明四年竟集壬辰隆月上澣桃華居  
士七十一歲誌焉



